

前近代的ネイション概念は近代主義を超えるか？

—— ナショナリズム起源論における概念的接近手法 ——

小 島 望*

はじめに

本研究は、ナショナリズム起源論における主潮たる近代主義的諸見解を、ネイション概念史研究における成果を用いて相対化する方法を提示するものである。第1章では問題の所在が提示される。第2章では、ナショナリズムの歴史的起源についてこれまでに著されてきた近代主義的立場の主張と、概念的観点から見たそれらの問題点を示す。第3章では、ネイション概念史研究の成果の意義とその限界を論じる。これらの後に、近代主義的通説を概念的視座より相対化する上でのアプローチが提示される。

1 問題の所在

ナショナリズム研究において¹⁾、ナショナリズムがいかなる歴史的段階に確認可能であるのかという問いは、中心的争点である。この問題を巡っては、ナショナリズムの19世紀的形成を主張する近代主義、その前19世紀的存在を訴

1) 本稿では、「ナショナリズム研究」を1930年代から1940年代にかけて、カールトン・ヘイズとハンス・コーンによって画時代的な研究が著されてから、今日までのナショナリズム、ネイション及び国民国家を主題とした様々なディシプリンにおける諸研究を包括する用語として用いる。

* KOJIMA, Nozomu 東京都立大学 非常勤講師 nozomukojima@gmail.com

える反近代主義の二つの立場が併存する²⁾。

コーンやヘイズによる古典的研究において、ナショナリズムは近代、より具体的には概ね 18 世紀後半から 19 世紀にかけて生じた歴史的事象であることが前提されていた (Hayes 1931; Kohn 1944)。また、ベネディクト・アンダーソン、アーネスト・ゲルナー、エリック・ホブズボームらが 1983 年に著した成果は後続の研究に大きな影響を与え、結果として近代主義の視座に主流の地位を与えた³⁾。しかしながら、近代主義に対して、反近代主義の研究が同時期から著され始めた。こうした非主流の動きを代表するのが、アンソニー・スミスである。彼はイデオロギーや政治運動としてのナショナリズムの出現それ自体を 19 世紀に見出しつつ、同時にネイションが形成される上での基盤たる政治的文化的カテゴリーとしての「エトニ」の前近代的存在を訴え、近代主義の相対化を試みたのである (Smith 1986=1999)。この時期以降、反近代主義の立場からの異議申し立てが盛んとなる。

近代主義と反近代主義との理論上の対立が、今日なおも継続中である点は注目されるべきであろう。ロッテ・イェンセンによれば、「近代主義と〔本稿における反近代主義と同義である〕伝統主義との間の二項対立に繰り返し言及することなくこの主題を論じることは事実上不可能になってしまっている」⁴⁾の

2) しばしば「原初主義 (primordialism)」や「永続主義 (perennialism)」といった術語が「反近代主義」と互換的に用いられる。しかし、「反近代主義」の同義語として「原初主義」、「永続主義」を使用することは問題含みであると筆者には思われる。「原初主義」はナショナリズムを構築的契機を欠いた自然的所与とする視座であり、ナショナリズムの歴史的古さを主張する議論との高い親和性は、この点に由来する。しかし近年では、これまで原初主義的とされてきた研究においても、実際には構築的側面が見られることが指摘されており、「原初主義」はナショナリズム研究における説明概念としては不適切ではないかとの主張が強まっている。また、「永続主義」という語は本文中に示した「反近代主義」とほぼ同義であるが、19 世紀以前にナショナリズムやネイションの存在を見出す立場の研究者が重視する時代には古代から近世という大きな時間的幅があるのに対して、「永続主義」という表現は人類社会誕生からナショナリズムが存在 (永続) するというニュアンスを意図せずして帯びてしまいかねない。かかる懸念を踏まえて、本稿ではより語弊が少なく、かつ「原初性」対「構築性」という存在論的論点に対して中立的な「反近代主義」を用いる。近年のナショナリズム研究における「原初主義」については (原百年 2011: 49-52; Coakley 2018: 327-47) を参照。

3) 後に 1983 年はナショナリズム研究における「奇跡の年 (annus mirabilis)」と評価され、近代主義的主潮を決定づけた (Wicke 2019: 134-44)。

4) Jensen 2016: 11。

ムに関連する、最も熱心に議論される争点の一つ」⁵⁾とする。かかる状況において、主流の地位にある近代主義的ナショナリズム形成論を、近代以前の歴史的段階におけるネーション概念についての研究によって相対化する手法を提示することが本稿の目的である。次章ではまず、近代主義立場に立つ代表的主張を概観したい。

2 近代主義とその概念的限界

2.1 近代主義

本節では、ナショナリズム研究における「奇跡の年」、1983年から近年にかけての近代主義の代表とも言うべき研究者の見解を提示する。具体的には、ゲルナー、アンダーソン、ジョン・ブルイリ、シニシャ・マレシェヴィッチの主張を瞥見する。

ゲルナーによれば、前近代的農耕社会においては、個々の社会内部における垂直的水平的分断が強固に存在しており、単一の言語や文化が構成員に進んで受容される余地はなく、政治エリートがそれを意図的に浸透させようとする動機も存在しなかった⁶⁾。そうした状況は、ナショナリズムの成立要因を絶対的に欠いたものであった。この状態に変化が訪れたのは、急速な工業化が現実のものとなった時期、すなわち18世紀末から19世紀初頭においてである。工業社会において、特定の社会の内部における言語的文化的断絶は、経済発展にとっての看過し得ぬ障壁となった。それは、工業社会において決定的に重要なコミュニケーションを阻害する要因であり、社会内部での移動、交流の足枷であった。こうした問題を解決するため、文化的インフラを監督する機構としての国家の必要性が承認され⁷⁾、特定の言語や文化を共有する民族集団と主権の接合を意味するナショナリズムが出現したとゲルナーは見る。すなわち、「第一義的には政治的な単位とナショナル(national)な単位とが一致しなければ

5) Storm 2018: 114.

6) Gellner [1983] 2006: 8-11=2000: 14-31.

7) Gellner [1983] 2006: 62-3=2000: 107-8.

ならないと主張する一つの政治原理」⁸⁾が浸透し⁹⁾、言語に代表される文化的指標を中心に措定されたネイションによる主権国家設立がにわかに重要性を帯び始めたのである。

アンダーソンの議論は、資本主義の発展をナショナリズムの形成要因の一つとする点においてゲルナーと共通するが、その主張の大筋は独自である。彼は、ネイションを先験的実在物ではなく、人々の脳裏に描かれる間主観的構築物として理解することを提案する¹⁰⁾。彼は、「顔を突き合わせる原始的な村落よりも大きな全ての共同体」¹¹⁾が実際には「想像」されたものであるとし、ネイションの構築性を明瞭な形で唱えた。彼によれば、出版資本主義が「想像の共同体」としてのネイションが成立する上での重要な要因であった。彼は、活版印刷の発明を契機として誕生した出版資本主義とナショナリズム形成との間に三重の連関を見出す。第一に、出版資本主義はラテン語以外の言語を通じたコミュニケーションの可能性を拓き、ネイションの「想像」の基本的条件を成した¹²⁾。第二に、出版の増加は、文法や語彙の標準化をもたらすこととなった¹³⁾。第三に、出版資本主義は言語の再編成をもたらすこととなった。出版業者による出版言語の集約と選別の結果、例えばチェコ口語はドイツ語とは異なった出版語として生き残った一方、北西ドイツ語はドイツ語に統合されるに至った¹⁴⁾。出版言語を媒介としてネイションの「想像」が可能となった点を踏まえれば、出版言語の再編が後のナショナリズムの形成に決定的な影響を及ぼすこととなったことは、想像に難くない。アンダーソンによれば、かく形成された「想像の共同体」としてのネイションの存在を前提するナショナリズムは、次のような性格を帯びている。

ネイションは、主権を有するものとして想像される。なぜならば、啓蒙と

8) Gellner [1983] 2006: 1=2000: 1. 本稿における引用は必ずしも訳書に基づいてはいない。

9) ゲルナーの議論において、ネイションの中核的要素は言語にあり、それゆえ彼は、ネイションを文化的同質性に基礎づけられた人間集団のカテゴリとして前提する。

10) Anderson [1983] 2016: 5-6.

11) Anderson [1983] 2016: 6.

12) Anderson [1983] 2016: 44.

13) Anderson [1983] 2016: 44-5.

14) Anderson [1983] 2016: 45.

革命が、神に任じられた (divinely-ordained)、階層的な王朝国家の正統性を破壊していた時代に、その概念が生じたからだ。最後に、それはコミュニティとして想像される。実際に存する不平等と搾取に関係なく、ネイションは常に深い、水平的同胞として想像されるからである。¹⁵⁾

アンダーソンが言語を中心とした文化的主権的集団カテゴリとしてのネイションの実在を前提する、ある種の認識枠組みとしてナショナリズムを理解する一方、ブルイリはそれを政治運動として把握する。近代国家の形成とそれに付随して生じた、国家と社会の分化に着眼する彼は、ナショナリズムを次の原則として把握する。

この語〔ナショナリズム〕は、国家権力を求め、もしくはそれを行行使し、そうした行動をナショナリストの主張によって正当化する政治運動に対して用いられる。ナショナリスト的主張とは、以下の三つの基本的見解に基づく政治的言説である。(A) 明瞭かつ顕著な特徴を有するネイションが存在している。(B) ネイションの利益と価値観は、他のあらゆるものの利益と価値観に先立つ。(C) ネイションは可能な限り独立した存在でなければならない。このことは通常、最低でも政治的主権の保持を意味する。¹⁶⁾

「明瞭かつ顕著な特徴を有する」——すなわち特殊性を帯びた——ネイションの名の下に行われる政治権力を巡る闘争の前提となったのが、近代国家の形成それ自体である。ブルイリによれば、近代以前から国家権力を意味する主権概念は存在してきた。しかしながら、中世的封建秩序にあっては、「私的なもの」と、王権との連関を有する「公的なもの」との区分は曖昧であり、諸特権的社团から編成された社会のあり方は国王権力が主権理念を実現する上での障壁であり続けた¹⁷⁾。そうした状況の変化を誘起したのは近世の絶対主義

15) Anderson [1983] 2016: 7.

16) Breuilly [1982] 1994: 2.

17) Breuilly [1982] 1994: 372.

国家に至る政治的社会的潮流である。絶対主義国家は、政治社会の上層——ブルイリ的に言えば「小さな政治的共同体」¹⁸⁾——の協力によって中央集権化に成功した。18世紀後半に本格化する「公」と「私」の区分、換言すれば、国家と、それと対峙する市民社会観念の普及は、政治社会上層をして文化的に均質な存在として想定されるネイションの名の下に市民社会構成員を動員することを可能ならしめた¹⁹⁾。かくて、ネイションを旗印としながら政治エリートたちが領導する政治運動としてのナショナリズムが成立したとブルイリは見るのである。

近年注目される近代主義の立場に立つ研究が、マレシェヴィッチによるものである²⁰⁾。彼は、国民国家とナショナリズムを、それぞれ「固定的かつ安定的な領域と、強力なイデオロギー的な特殊主義、その構成人員の間における価値的平等主義、社会的連帯、文化的一体性の普及によって裏付けられた中央集権的政治権威を伴う、世俗的社会組織」²¹⁾、「人間の連帯と政治的正統性の主要な単位としてネイションを仮定する、人民によって共有された認識とそれに対応する実践に依拠したイデオロギー」²²⁾として定義する。両者を近代において成立させた要因が、社会組織の累積的發展、遠心的イデオロギー化、ナショナリズムのミクロ的連帯への浸透である。マレシェヴィッチは、国民国家を政治的社会組織の変遷の最終的到達点として把握する。ここでの「社会組織」とは、人類が自己の生存のために構成する集団一般を意味する。とりわけ政治的なものは、「政体」と言い換えてもよい。彼が政治的社会組織の重要な特徴として挙げるのは、それが強制力を備えた共同体であり、その力が過去から現在へと累積的に強化され続けている点である²³⁾。この点において、国民国家は人類が経験してきたあらゆる政治的社会組織の中で、最も強固な組織の力を有するものと言えよう。その権力を資源として国民国家が自己の恒久的再生産ために志

18) Breuilly [1982] 1994: 374.

19) Breuilly [1982] 1994: 374-6.

20) ストームによれば、マレシェヴィッチの研究において「ナショナリズムの起源についての近代主義的な解釈は更新された」(Storm 2018: 115)という。

21) Malešević 2013: 66.

22) Malešević 2013: 66.

23) Malešević 2013: 68-70.

向するのが、イデオロギーとしてのナショナリズムの普及、すなわちイデオロギー化である。18世紀末の政治的社会的変動——市民革命の結果生じた政治的正統性の間隙、あるいは工業化によって弛緩した旧来の社会的紐帯の補完の必要性²⁴⁾——を背景に、国民国家を支えるナショナリズムのイデオロギーが出現した。彼は、国家主導の「上から」の注入のみならず、「下から」の順応というその浸透形態に着目する²⁵⁾。その際に用いられる分析概念が、「ミクロ的連帯」である。人が自らとアイデンティファイするのは政治体等の大規模な組織ではなく、より小さなミクロ的連帯に属する人々であることが、マレシェヴィッチの議論の前提である²⁶⁾。具体的には、地域や血縁を軸とした小規模なコミュニティが、ミクロ的連帯の例である²⁷⁾。それゆえ、ナショナリズムは教育やマス・コミュニケーションといった正面の回路のみならず、ミクロ的連帯を介して、言わば迂回路を經由しながら市民社会へと浸透するのである。

これまでに確認してきた四者の見解における共通項は、主権の文化的集団カテゴリーとしてのネイションを中心とした認識の政治原理化あるいは大衆的普及を前提する点である。言語を軸として定義されるネイションと国家的領域との一致を求める政治原理（ゲルナー）、ネイションの存在を前提する世界観（アンダーソン、マレシェヴィッチ）、大衆の政治運動への動員（ブルイリ）²⁸⁾は、この両点のいずれかに収斂するのである。

2.2 近代主義的研究のネイション概念的限界

前節に見た近代主義的見解に対しては、先に触れたように、ナショナリズム、ネイション、国民国家の前近代主義的存在を主張する反近代主義的研究が提起されている²⁹⁾。反近代主義に立脚した主張の内実は多様であるが、ナショナリズムやネイションあるいはそれらの初期的形態を19世紀以前に見出そう

24) Malešević 2013: 79.

25) Malešević 2013: 14, 76-7.

26) Malešević 2013: 14.

27) Malešević 2013: 86.

28) ブルイリはマス・コミュニケーションや教育制度を通じたナショナリストの主張への大衆の順応を政治運動としてのナショナリズムの必要条件とする（Breuilly [1982]1994: 21-2）。

29) Roshwald 2006; Grosby 2005: 3-26; Hastings 1997; Gat and Yakobson 2012.

とする点において共通する。反近代主義的議論一般の妥当性についてはここでは触れないが、以下では近代主義的見解に伏在する概念的次元における問題点を指摘したい。

ブルイリを別とする前節に見た近代主義者らの所説においては、近代以前においてネイションという語によって指示された対象、すなわちネイション概念への十分な注意が向けられているとは言い難い。彼らが分析概念として設定するネイションの基準とその由来を考慮すれば、この点は問題含みである。前節で確認したように、近代主義者たちはネイションという人間集団のカテゴリ、そしてそこから派生したナショナリズムに政治的（対外的独立性／政治的正統性）、文化的要素（エスノカルチュラルな均質性の自覚）の双方を見出していた。それでは、ネイションがこの両点を基底に据えた分析概念として前提されるのは、いかなる所以があつてのことなのだろうか。

この点について明確な、そして恐らくは意図せざる回答を提示したのが、クリシャン・クマールである。彼は、前近代におけるネイションの初期的形態、すなわち「エトニ」の存在を指摘したスミスの主張に対して、ネイションという分析概念が充当されるには、その集団内部での政治的な意味での水平的連帯意識が必要条件となると論難するに際して、次のように言う。

これは確かに 18 世紀後期から 19 世紀にかけてのネイション概念 (concepts of the nation) に影響されている、ということになるのだろう。しかし我々は……それを避けられるのであろうか？この時代において初めて、ネイション概念は精査され、最も徹底的に究明されたのではなかったか？ナショナリズム以前にネイションが存在していたと最も確信する研究者たちですら、ネイションの何かしらの定義を用いて〔研究に〕取り組まねばならず、そしてその定義が 19 世紀に確立されたものから大きく異なっているとしたら、それは奇妙なことである。³⁰⁾

ここで、クマールは自らの——より一般化すれば、彼が支持する近代主義的機軸における——ネイションの基準が、19 世紀というそれ固有の背景を備え

30) Kumar 2005: 141.

た一時代区分におけるネイション概念に依拠するものであることを告白している。見方を変えれば、彼らは19世紀的ネイション概念の存在を、近代以前において問題視していると言えよう。

近代主義者らが19世紀においてネイションという語によって指示された対象とそれが帯びた性格を議論の前提とし、かつその前19世紀的存在を否定している以上、反近代主義の側は——トートロジーの誹りを免れないとしても——19世紀的なネイション概念と類似したネイション概念の前近代における存在を追究することを通じて、近代主義者に対する本質的批判を提起し得るはずである³¹⁾。別言すれば、近代主義者の側は、近代と前近代との間に横たわるネイション概念の異同を立証する義務を負っている。通説によれば、ネイション概念はラテン語の「生まれる」(nascor)という動詞に由来する「ナシオ」(natio)に端を発し、中世においてそれは公会議における地域代表や、大学の学生団体を指示した³²⁾。近世以降、ナシオ(ネイション)は、身分制議會への参加権に代表される特権社団と同義となり³³⁾、フランス革命を契機として再解釈を余儀なくされたネイションの編成原理は、身分から文化へと変化し、その帰結として政治社会上層のみならず、社会構成員全般へとその指示対象を移すこととなった。

近代主義の側に立つ研究者らは、かかる通史的理解に立脚しながら、フランス革命以前のネイション概念の非近代的性格を強調する。しばしば強調されるのは、1789年以前のネイション概念が政治参加権を備えた社会上層の集団を意味する「政治国民」(political nation)であったという見解である³⁴⁾。この点は、ホブズボームによつて的確に要約されている。

というのも、後にネイション＝ピープルとなるものの語彙を本来的に形成することになるのは「政治的ネイション」〔「政治国民」〕であるが、ほ

31) もっとも、後述するように、19世紀的なネイション概念と類似した前近代ネイション概念が確認可能であることは、ナショナリズムという多様な表出形態を備えた現象の前近代的存在を一律的に立証するものではない。

32) Zernatto 1944: 354-61.

33) Zernatto 1944: 361-6.

34) Kumar 2003: 102; Mann [1986] 2012: 463=2002: 508-9.

とんどの場合、「政治的ネイション」とは国家の住民のほんの一部の人々のことであって、それ以上のことを含意するとは理解されていないからである。そのほんの一部の人々とは、特権のエリートたち、つまり貴族階級と紳士階級であった。³⁵⁾

ホブズボームのかかる見解が正鵠を射ており、近代以前のネイション概念の政治的意義が大ききものでなかったのであれば、近代主義者らの主張の妥当性が確保されよう。しかしながら、実証的にこうした主張と対立する議論が提起されており、前近代的ネイション概念の非19世紀的性格を前提する傾向にある点において、近代主義者の所説は問題含みである。この点について、章を改めて論じたい。

3 19世紀以前のネイション概念とその意義

3.1 近代以前のネイション概念

本節では、これまでに著されてきた研究を踏まえ、中世と近世におけるネイション概念のあり方について概観する。中世におけるネイション概念が、教会及び大学運営上の地域区分において用いられる傾向にあるとの通説的理解については、前章第2節で触れた通りである。しかしながら、中世におけるネイションという語が決まってそうした対象のみを指示していたわけではない。中世史家スーザン・レイノルズは、初期中世ヨーロッパを封建的割拠状態といった鍵概念によって説明することを否定し、国王を頂点とする王朝的枠組みが高度な政治的社会的集合性を備えていたと解釈する。彼女はそうした非封建的な初期中世ヨーロッパにおいて、集団的な血統イデオロギーが政治的正統性を帯びる形で流布していたとする。それは、政治体の総員が自らの居住する地域をかつて征服した先祖の血統を継受するとの認識³⁶⁾、あるいは自らを聖書に記されたノアや、ギリシャとの戦争に敗れたトロヤ人の末裔とする系譜神話という

35) Hobsbawm 1990: 73=2001: 92.

36) Reynolds 1984: 258-9; 2005: 57, 59.

形態で出現した³⁷⁾。レイノルズは、かかる伝説の存在を、初期中世の基盤を成した政治的社会的集合性の証左としているのである。さらに彼女は、そうした政治認識のあり方と、当時の政治的概念との間に存する親和性を指摘する。彼女によれば、先に触れた通説的理解とは異なり、政治的文化的共同体の構成員を指示する語として「人民」(populus)、「氏族」(gens)、「ナシオ」(natio)が用いられており³⁸⁾、その内部での連帯は、先述の血統神話によって維持されていたのである³⁹⁾。要約的に述べれば、レイノルズの議論においてネイション概念は国王によって代表される政治体と、血統的紐帯に基づく文化的実体という、重複する二つの共同体を意味するものであったと解釈されているのである。

中世におけるネイション概念の重要性を指摘したのは、レイノルズだけではない。中世におけるアイデンティティのあり方をナショナリズムの表出と見なすリース・デイヴィスは、ナショナリズム研究者は分析概念として設定されたネイション以上に、個々の歴史的文脈におけるネイション概念に焦点を合わせるべきであると主張する。

意識的にか無意識的にか、何がネイションであるのか、またはあるべきなのかという点についての、まさに新ウェーバー的な理念型を構築することで近代主義的議論は継続しているようにしばしば思われる。これは、確かに定義の明確化に資する。けれども、術語の明確さの追求は、過去に対する我々の評価の矮小化、さらには歪曲にしばしば帰結する。歴史家は、自分たち自身の価値自由な専門用語を持ち合わせてはいない。彼らは、厳密性に欠きながらも、昨日の社会を描写するために当時の言説における日常の言語や概念を用いるのである。⁴⁰⁾

このような視座を前提するデイヴィスの研究は、いきおい当時のネイション概念に着目する。彼は中世の言説におけるナシオが大学の学生団体を意味する

37) Reynolds 1983: 375-7.

38) Reynolds 1983: 380; 1984: 255-6.

39) Reynolds 1983: 376.

40) Davies 2004: 568.

事例が存在したことそれ自体は否定しない一方、それが今日的なニュアンスを帯びる形で用いられる場合についても注意を促している⁴¹⁾。ナシオは個々に独自の「言語、法、習性、判断様式、慣習」⁴²⁾を備えた集団として想定され、それは例えば13世紀イングランドに見られた「イングランド王国のネイション」⁴³⁾という表現から解されるように、王権との関係において政治的意義を有する概念であった⁴⁴⁾。

近世におけるネイションが身分制議会への参加権等を有した階層を意味したとの通説的見方に対しても、実証面からの批判が提起されている。以下では、リーア・グリーンフェルド、カスパー・ヒルシ、フィリップ・ゴースキらの主張を概観したい。

グリーンフェルドによれば、イングランドにおけるネイションは、チューダー朝期において、政治参加者の集合を意味する概念であった。チューダー朝期のイングランド社会は伝統的貴族の没落と、法律家に代表される中間層、並びにジェントリといった「新貴族」の勃興を見、それが政治社会の構造的変化をもたらした⁴⁵⁾。伝統的権威を欠いた「新貴族」は、自らをネイションの一部に位置づけ、それを根拠として政治参加への道を切り開いていった⁴⁶⁾。こうした社会構造の変化と対応するようにネイションの政治的権威が前景化する一方、メアリー1世期における殉教の記憶は、当時のネイション概念に二つの影

41) Davies 2004: 570.

42) Davies 2004: 571.

43) Davies 2004: 574.

44) 中世におけるナシオ概念が政治性を帯びた言説において中心的役割を担った例としては、1320年にスコットランド王国が教皇に提出した、いわゆる「アープロース宣言」が挙げられよう。ここでは貴族から自由土地保有者までの階層を含む署名者らが、「我らのナシオ」の古さやイングランドからの独立性、スコットランド王がイングランドに恭順した場合の王権の否認等を主張している。エドワード・コーワンは、これを「スコットランドがネイションであること[nationhood]と立憲主義[constitutionalism]の最高の断言」(Cowan 2020: 39)であるとする。また、ジョナサン・ハーンは、スコットランド・ナショナリズムの中核を構成する契約的伝統の先駆けであるとの極めて本質的主義的解釈を提示する(Hearn 2001: 156-8)。こうした見方が存在する一方、ニール・デヴィッドソンは宣言に署名した社会層以外の人々の当時の認識が解明できないことを根拠としてその意義を疑問視しており(Davidson 2000: 50-1)、また、アープロース宣言はその後のスコットランドで忘却されており、それはスコットランド政治社会のあり方に影響を及ぼしてはいないとの修正的見解が提示されている(Mason 2014: 265-8)。

45) Greenfield 1992: 44-9.

46) Greenfield 1992: 49-50.

響をもたらした。第一に、カトリックによる弾圧を経てもなお息づいたプロテスタント信仰は、「ネイションの固有性と独自性」⁴⁷⁾を提供した。第二の変化はメアリー1世期の弾圧に抗する上でネイションの政治的権威が承認されるに至った点に見出される⁴⁸⁾。こうして、メアリー1世からエリザベス1世の治下において、政治的権能と独自性を伴った人間集団としてのネイション概念が一層前進したとグリーンフェルドは見る。

イングランドにおけるネイションは、17世紀の三王国戦争期に決定的変化を迎えるに至る。第一に、プロテスタンティズムと王政と常に結び付けられて認識されていたネイションがこれらとの関係を断ち切り、いわば自足的存在として理解されるよう変貌を遂げた⁴⁹⁾。第二に、ネイションと「自由」の理念が積極的に接合され、ネイションは「各構成員の尊厳と自由の観点から定義」⁵⁰⁾された。グリーンフェルドが見出すネイションの「自由」とは「政治参加の権利に関する事柄」⁵¹⁾である。同時に彼女は、従来であればネイション構成員としての自覚を伴わなかった階層の人々が自らをその一部として位置づけたと主張し、この時期のイングランドにおけるネイション概念の包摂対象の広がりを示唆している⁵²⁾。このように彼女は、16世紀から17世紀のイングランドにおける「主権を備えた人々」⁵³⁾を意味する最も初期の近代的ネイション概念を見出すのである。

カスパー・ヒルシは中世後期から近世にかけての神聖ローマ帝国の政治言説における「ドイツ人」(Deutsche)、「ネイション (ナツィオン)」(Nation)、「祖国」(Vaterland)等の諸概念を検討した⁵⁴⁾。ヒルシは、神聖ローマ帝国におけるナシオ (ナツィオン) と文化的、政治的要素との連関が既に中世末期から近世初頭に看取されると見る。14世紀中期に始まったベーメンにおけるドイツ系住民とチェコ系住民の対立の結果、各々の「ナシオ」は「言語的文化的基盤に

47) Greenfeld 1992: 62.

48) Greenfeld 1992: 57.

49) Greenfeld 1992: 77.

50) Greenfeld 1992: 77.

51) Greenfeld 1992: 77.

52) Greenfeld 1992: 77.

53) Greenfeld 1992: 9.

54) Hirsch 2005; 2006; 2012.

立脚した集団形成」⁵⁵⁾を経験し、ネイション（ナツィオン）は言語を共有する集団として認識されるに至った。こうした変化の上に生起したのが、ネイション（ナツィオン）によって意味される人々の階層横断的の広がりであった。つまり、社会階層の高低に関わらず、同じ言語を用いる人々は共にネイション（ナツィオン）を形成する——ヒルシの言を借りれば「言語集団が身分に先立つ」⁵⁶⁾——との認識が生来したのである。社会的政治的階層性を前提とした身分制秩序とは異なる集団編成原理の端緒を、この時期のネイション（ナツィオン）概念は獲得したと言えよう。

ネイション（ナツィオン）が概ね言語によって区分された人間集団を意味するに至ったのは、15世紀半ばから16世紀初頭の人文主義者の言説においてであった⁵⁷⁾。彼らは、ドイツ語の古さ、そして古代ゲルマニアから続く名誉と血統を称え⁵⁸⁾、それらをネイション（ナツィオン）の基準に据えた。こうして、ネイション（ナツィオン）はその内部の政治的階層性を維持しつつ、政治社会下層の人々をも包括する文化的共同体を意味する概念としての性格を獲得したのである⁵⁹⁾。

ネイション（ナツィオン）の政治言説を本格的に、かつ意図的に展開したのがマクシミリアン1世であった。オスマン帝国の西進や、彼の治世に始まったフランスとの断続的戦争といった状況に対処するべく、彼は帝国諸身分（Reichsstände）を動員するための政治資源としてネイション（ナツィオン）の理念を活用した。すなわち、自らとハプスブルクをネイション（ナツィオン）の保護者かつ指導者として描き出すことで、自身の対外政策の正当化を図ったのである⁶⁰⁾。彼の後を襲ったカール5世も、皇帝選定に立候補したフランスのフランソワ1世に抗すべく、自身を「敵対するネイションからドイツ人を守る

55) Hirsch 2005: 131.

56) Hirsch 2005: 131.

57) Hirsch 2005: 152-5.

58) Hirsch 2005: 150-1.

59) ヒルシは人文主義者の言説におけるネイション（ナツィオン）概念が全ドイツ語話者を包摂したのは、あくまでも理論上のことであったとしている一方で、同時にネイションの名誉の観念は身分超越的なものとして想定されたとも言う（Hirsch 2005: 39, 375; 2006: 383）。

60) Hirsch 2005: 157-74.

盾」⁶¹⁾として位置づけるプロパガンダを展開した。しかしながら、ネイション（ナツィオン）を自らの政治の正当性の源泉に据えるこうした発想は、ハプスブルクとの敵対関係に陥る諸勢力にも利用されることとなる。カール5世への抵抗を志向するに至った選帝侯、騎士戦争に突き進んだフッテンらによってネイション（ナツィオン）概念は自らの大義名分を担保する存在として援用され、そしてそれは宗教改革者たちの言説にも影響を与えたのである⁶²⁾。

フィリップ・ゴースキは、16世紀半ばの独立戦争期から17世紀にかけての約一世紀に渡るオランダの政治言説や表象の中に、ネイション概念の近代性を見出そうとする。その結果、「近代以前のネイション意識（national consciousness）は近代主義者が認める以上に近代的ナショナリズムと類似しており、実際には両者の間に厳格な線引きを行うことはできない」⁶³⁾と彼は結論するのである。

ゴースキによれば、独立戦争期（1568年～1620年代）のオランダのパンフレットや祈祷文、軍歌やコイン、さらには絵画といった媒体には、二つの筋が看取されるという。すなわち、「ヘブライ的ナショナリズム」と「バタヴィア的ナショナリズム」である。「ヘブライ的ナショナリズム」は、オランダ人を旧約聖書におけるヘブライ人と同様の選民として描写する言説である。それは、オランダ側の指導者オラニエ公ウィレムをダビデやモーセに⁶⁴⁾、スペイン王フェリペ2世をエジプトのファラオに擬えるものであった⁶⁵⁾。ゴースキは、旧約聖書の事例とのアナロジーを前面に展開する言説や表象が公的な祈祷文や全国議会（Staten Generaal）の宣言文にも看取されると述べ⁶⁶⁾、「ヘブライ的ナショナリズム」の社会的広がり存在を強調している。「バタヴィア的ナショナリズム」は、より世俗的な世界観を下敷きとしたものである。それは、オランダ人をタキトゥスの『ゲルマニア』に記述された古代バタヴィア人の末裔と見なし、両者の共和政体を連続したものと捉える視座に依拠していた。グ

61) Hirsch 2005: 390.

62) Hirsch 2005: 381-485.

63) Gorski 2000: 1492.

64) Gorski 2000: 1436.

65) Gorski 2000: 1438.

66) Gorski 2000: 1441-2.

ロティウスの『古代バタヴィア共和国論 (De antiquitate reipublicae Batavicae)』が、こうした見方の形成に大きく貢献したとゴースキは説明する⁶⁷⁾。

ゴースキによれば、「ヘブライ的なナショナリズム」の浸透の程度は「バタヴィアのナショナリズム」以上である一方、「バタヴィア的なナショナリズム」は「政治的主権が、真にネイションであること (true nationhood) の前提条件である」⁶⁸⁾ことを示唆し、かつ文化的集合体を意味するネイションという語により多く言及した点において⁶⁹⁾、画期的であった。ゴースキは、これら二つの言説体系の融合の結果として、17世紀半ばに近代的ネイション概念が成立したと見る。

三十年戦争を経て独立を達成したオランダでは、オラニエ派と反オラニエ派との間の内部対立が激化し、互いにパンフレット等の媒体を通じたプロパガンダ合戦を展開した。その中で、ネイション概念を巡る大きな変化が生じたとゴースキは言う。第一に、1648年以降、中央政府と「オランダ人」(Netherlandish people)を意味するネイションという語がパンフレットで頻出するようになった点である⁷⁰⁾。第二に、「オランダ人」(Dutch people)、「主権の人民」(sovereign people)、「一般大衆」(common people)が同義となったことである。こうして、既に1560年代より互換性を伴った「ネイション」(nacie, nacioen, natie)と「人民」(volc, volck, volk)の双方が「主権」(Heerschappy)を備えた存在として認識されるに至ったとゴースキは示唆する⁷¹⁾。

3.2 前近代における近代的ネイション概念の意義と限界

前節で概観した諸見解は、中世と近世の両時代において、ネイション概念が正統性や政治的紐帯、そして文化的共同性を備えた集団として想定された可能性を示すものである。ここでは、そうした所説の意義と限界を、近代主義的ナショナリズム論との関係において追究したい。

ここで重要であるのは、18世紀末から19世紀にかけての市民革命を契機と

67) Gorski 2000: 1443.

68) Gorski 2000: 1444.

69) Gorski 2000: 1444.

70) Gorski 2000: 1447.

71) Gorski 2000: 1450-1.

して包含するに至ったとされる諸要素を、ネーション概念がそれ以前から既に備えていたことを指摘する点において、これらが近代にナショナリズムの出発点を見出す通説の相対化に貢献し得る可能性である。もっとも、これはナショナリズムという事象に対する分析視角に左右されよう。具体的には、世界あるいは人類は本来的に文化的共同性と主権を具備するネーションという人間集団のカテゴリを主要な構成単位として分割されていると前提し、かつそうした理解を参照枠とする——アンダーソンやマレシェヴィッチらが焦点を当てる——ある種の世界観として把握する場合、前節に見た一連の研究は、ナショナリズム起源論における近代と前近代との区分を曖昧なものにしよう。

とはいえ、ナショナリズムを本質的に政治運動（ブルイリ）や政治原理（ゲルナー）という観点から理解しようとする際、前近代におけるネーションという語が近代性を示唆する形で用いられているという主張それ自体は、ナショナリズムの存在あるいはその初期の形態の証明とはならない。仮に近代以前のネーション概念とそれを踏まえた言説や政治運動という次元から両者の存在を根拠づけるのであれば、ネーション概念あるいはそれを前提する思考枠組みが近代以前の政治過程や運動において、それに関与した人々の政治的動機ないしは意図を正当化（正統化）するロジックとして十分に機能していたことが立証されなければならない。

世界観としてのナショナリズムの前近代的存在を同時代におけるネーション概念という観点から立証しようとする試みにも、独自の困難さが付きまとう。まず、仮に政治的文化的共同性や主権、それが指示する対象の階層的広さが近代以前のネーション概念に見出されるとしても、ネーション概念のそうしたあり方がどれほど固定的あるいは一般的であったのかが問題となる。仮にそれが近代以前のネーション概念の普遍的なあり方であったとしたら、例えば中世におけるネーションという語は学生団体や公会議における地域代表を決まって意味していたとの通説的見解は、そもそも提示されなかったはずである。これと関連する論点として、同じ前近代においても、ネーション概念が帯びた性格については、地域と研究者の解釈によって相当の異同を示すことにも注意が払われるべきである。例えば、グリーンフェルドの描く16世紀から17世紀にかけてのイングランドにおけるネーション概念は宗教との関係が比較

的重視されている一方で⁷²⁾、同時期のドイツにおいてその存在が指摘される、ネイション概念と言語的血統的共同性との関係は強調されない傾向にある⁷³⁾。つまり、今日のネイション概念においてしばしば前提されるエスノカルチュラルな側面が、グリーンフェルドの説明においては十分に検証されたとは言い難い⁷⁴⁾。同様に、ブルイリはゴースキが検証した近世オランダにおけるネイション言説は「いずれも民族的内実を欠く」⁷⁵⁾と評する。この点は近代以前のネイション概念におけるエスノカルチュラルな側面についての解釈上の難点を示すものである。というのも、ブルイリによる論難にもかかわらず、ゴースキは当時のオランダの言説に、「他のネイション」たるスペイン人たちは自分たちとは異なり、「傲慢かつ残酷」⁷⁶⁾であるとの認識が見られる旨を述べているのである。さらに彼は、次のように言う。

17世紀半ば以降、……非常に多くのオランダの男女が自分たちの世界を、とりわけネイションから成る世界（a world of nation）として認識した。多くのパンフレット出版者によるスペイン・ネイション、イングランド・ネイション、フランス・ネイション、そしてもちろんオランダ・ネイションについての語り方から、このことは明白である。これらの著述家たちが、様々なネイションを言語、慣習、性格という観点から相互に異なったものとして見なしていたということにも、些かの疑いもない。これらの相違点を列挙し、説明しようとした者すら存在したのである……。グロティウス自身、そうした違いがスペインへの反乱の根底にあったと信じていたのだ……⁷⁷⁾

72) クマールは現実には17世紀の内戦においては、宗教こそが中心に位置するのであり、ネイション概念は周縁的存在であるに過ぎないとし、後者を強調するグリーンフェルドの論を批判している（Kumar 2003: 122-7）。

73) 17世紀ドイツにおけるネイション概念については（Gardt 2007: 467-90）。

74) もっとも、既述のように近世イングランドにおいてプロテスタンティズムという形でネイション概念の独自性が表出したとしながら、グリーンフェルド自身もネイション概念と文化的共同性との連関は近世以降に成立したと見ている。しかしそうであるのならば16世紀から17世紀において近代的ネイション概念が生じたとの彼女の主張には、やや無理がある（Greenfield 1992: 9）。

75) Breuilly 2005: 87.

76) Gorski 2000: 1438.

77) Gorski 2000: 1450.

このように、ゴースキは当時のオランダにおけるネイション概念が、個々の文化的特徴を備えた人間集団としての側面を帯びていたことを明示しているのである。では、ゴースキの研究はネイション概念におけるエスノカルチュラルな次元を等閑視している——それゆえにゴースキは近世的ネイション概念における近代的性格を立証し得ていない——とのブレイリの評価はなにゆえ下されたのであろうか。この問題への説得力のある解答を提示することは困難であるが、ネイション概念と文化的要素の結合、より広く言えば、世界は個々に文化的特徴を備えるネイションという人間集団を基本的単位として構成されている（されるべきである）という認識の大衆的浸透の程度と関連するものであると考えられる。つまり、識字率が低い当時、そうした理解が民衆レベルで十分に浸透してはいなかったとの判断がブレイリの見方の背後に潜んでいるのではないだろうか。これは、産業革命以前の社会構造において、大多数の社会階層はナショナル・アイデンティティを備え得なかったとするゲルナーの主張とも接続する点である。

以上のように、近代的性格を帯びたネイション概念の前近代的存在は主潮たる近代主義的諸見解を修正し、近代主義対反近代主義というナショナリズム起源論における有力な二項対立を相対化する可能性を秘めている。それは、分析概念への方法論的偏重を脱し⁷⁸⁾、個々の歴史的社会的文脈におけるネイション概念に着目する点において、同時代的理解の中にナショナリズムの存否あるいは形成過程を検証し得る特長を備える。しかしながら、近代以前のネイション概念を手がかりとしながらナショナリズムの形成と浸透のプロセスを追究するには、本節で概観した点を踏まえた研究上の手続きを用いる必要がある。

結論

これまでに確認したように、前近代的ネイション概念を切り口としながらナショナリズムの存否や形成過程を追究するには、いくつかの接近手法が必要であると思われる。これらを提示することで、ナショナリズム起源論における今

78) この問題は、近代主義への理論的批判の先駆けとなったスミスの研究にも指摘できる (Smith 1986 = 1999)。

後の研究視座を提示し、本稿全体の結論としたい。

第一に、ネイション概念が意味する一般的対象、それが帯びた性格や相対的重要性を、時代及び社会ごとに検討する必要がある。例えば中世におけるネイション概念が政治体を構成する人民の総体を意味するのか、あるいは大学の学生団体ないしは公会議における地域代表を指示するのかという点についての見解の相違を考慮すれば、この課題の必要性は自明である。この際、二つの点に留意しなければならない。第一に、ネイションという語を用いる言説を展開する主体の置かれた政治的社会的立場を考慮すべきである。概念の帯びるニュアンスは、特定の社会や時代の文脈と並んで、言説の紡ぎ手自身の特殊な思考に影響される。それゆえ、前近代におけるネイション概念の追究に際しては、社会と時代を共有する複数の言説主体によって残されたネイションという語の用例を分析し、個々の主体に固有の偏りを低減するよう試みる必要がある。第二に、ネイションの隣接諸概念との関係における相対的重要性が解明されなければならない。つまり、仮に近代以前における特定の社会でのネイション概念の一般的用法の中に、政治的正当（正統）性の源泉としての性格や、広範な社会層の包摂、さらには文化的独自性を備えた集団としての側面が看取されとしても、その用例の数が「国家」(state)、「王国」(kingdom)、「人民」(people)、「臣民」(subjects)といったネイションと重複する概念と比して少数であるのならば、その意義は小さなものとなってしまう、例えば世界観としてのナショナリズムの存在を立証することにはならない。これら二つの定量的作業に際しては、大量のテキストにおける語を機械的に処理し得るテキスト・マイニング的手法が有用であるだろう⁷⁹⁾。

次に、より定性的な手法も必要とされる。つまり、政治運動や政治原理としてナショナリズムを捉えた場合、実際の政治過程において、ネイションが政治的権威とエスノカルチュラルな要素を兼ね備えた集団であるとの認識が政治決定に影響を及ぼしたことを立証する必要がある。この場合、近代的性格を帯びたネイション概念の量的検証それ自体は意味をなさず、政治決定や政治的運

79) テキスト・マイニングを用いた19世紀以前の概念研究の例としては(左古 2017: 368-85)。定量的分析を部分的に用いつつ、ネイションとその隣接諸概念の政治的意義や普及の程度といった観点からフランスにおける言説的变化を、17世紀末から19世紀にかけて分析したデヴィッド・ベルによる研究も重要である(Bell 2003)。

動——国王や貴族らによる政談、国制を巡る議論、対外政策の討議や民衆蜂起の遂行——に際して、それらに関与したアクターにとって、ネイション概念とそれを前提する世界像が重要なファクターとして認識されていたという点が証明されなければならない。この場合、先に述べた定量的分析ではなく、政治決定プロセスを探索する上で必要となる史料への定性的検証が求められる⁸⁰⁾。

また、ネイション概念を手がかりとしながら近代以前におけるナショナリズムそれ自体あるいはその初期的形態を見出そうとする研究は——世界観、政治原理、運動の別を問わず——その大衆的浸透の存否という難問を抱えている。一部の反近代主義系研究者らは教会を経由したナショナル・アイデンティティの大衆への伝達の存在を指摘しているが⁸¹⁾、どの程度それが実際に民衆へ浸透していたのか、また仮に彼らの脳裏に何らかの主権的文化的集合体が、宗教的ないしは地域的カテゴリよりも重要な地位を占めていたとして、それがネイションという語によって意味されていたのかという点は、実証が困難である。唯一史料的に裏付けることが可能であるのは、民衆に内面化した認識自体ではなく、他の主体が彼らに対して展開しようとしたナショナルな世界観の存否である。教会という情報ネットワークを通じて大衆へと伝達された言説は、この点の解明にこそ資するであろう。

本稿では、ネイション、ナショナリズムが近代において生じたとする近代主義的見解において前提される 19 世紀的ネイション概念と類似したその前近代的存在を示す諸見解が概観され、それを踏まえてナショナリズムの前近代的存在あるいはその初期的形態を見出すための具体的方法が案出された。むしろ、近代主義的見解を相対化する上での視角は、個々の歴史的段階と社会におけるネイション概念に依拠したもの以外も想定できよう。しかしながら、近代と前近代においてネイションという語によって指示された対象に着目することで、様々に設定された分析概念を用いる研究以上に同時代的理解に迫ることができるという強みをネイション概念に着目する手法は備えているのであり、この点を踏まえた研究が今後望まれるのである。

80) こうした研究の例としては、(中澤 2009) が挙げられる。もっとも、筆者はこの研究において基本的視座とはされていない、前近代から近代への移行という発展的見方を前提するものである。

81) Gat and Yakobson 2012: 147-8; Beaune 1985: 321.

[文献]

- Anderson, Benedict, [1983] 2016, *Imagined Communities: Reflection on the Origins and Spread of Nationalism*, Revised ed., London / New York: Verso.
- Beaune, Colette, 1985, *Naissance de la nation France*, Paris: Gallimard. (Susan Ross Huston trans., 1991, *The Birth of an Ideology: Myths and Symbols of Nation in Late-Medieval France*, Berkeley: University of California Press.)
- Bell, David, 2003, *The Cult of the Nation in France: Inventing Nationalism, 1680-1800*, Cambridge: Harvard University Press.
- Breuilly, John, [1982]1994, *Nationalism and the State*, 2nd ed., Chicago: University of Chicago Press.
- 2005, “Changes in the political uses of the nation”, Len Scales and Oliver Zimmer eds., *Power and the Nation in European History*, Cambridge: Cambridge University Press, 67-101.
- Coakley, John, 2018, “ ‘Primordialism’ in nationalism studies: theory or ideology?”, *Nations and Nationalism*, 24 (2): 327-347.
- Cowan, Edward J., 2020, *The Declaration of Arbroath: ‘For Freedom Alone’*, New ed., Edinburgh: Birlinn.
- Davidson, Neil, 2000, *The Origins of Scottish Nationhood*, London: Pluto Press.
- Davies, Rees, 2004, “Nations and National Identities in the Medial World: An Apologia”, *Revue Belge d’histoire contemporaine*, 34: 567-579.
- Gardt, Andreas, 2007, „Nation und Volk. Zur Begriffs- und Diskursgeschichte im 17. und 18. Jahrhundert“, *Zeitsprünge*, 2 (3-4): 467-490.
- Gat, Azar and Alexander Jakobson, 2012, *Nations: The Long History and Deep Roots of Political Ethnicity and Nationalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gellner, Ernest, [1983]2006, *Nations and Nationalism*, 2nd ed., New York: Cornell University Press. (加藤節監訳, 2000, 『民族とナショナリズム』岩波書店.)
- Gorski, Philip, 2000, “The Mosaic Moment: An Early Modernist Critique of Modernist Theories of Nationalism”, *American Journal of Sociology*, 105 (5): 1428-68.
- Greenfeld, Liah, 1992, *Nationalism: Five Roads to modernity*, Cambridge: Harvard University Press.
- Grosby, Steven, 2005, *Nationalism: A Very Short Introduction*, Oxford: OxfordUniversity Press.
- 原百年, 2011, 『ナショナリズム論——社会構成主義的再考』有信堂.
- Hastings, Adrian, 1997, *The Construction of Nationhood: Ethnicity, Religion and Nationalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayes, Carlton, 1931, *The Historical Evolution of Modern Nationalism*, New York: R. R. Smith
- Hearn, Jonathan, 2001, *Claiming Scotland: National Identity and Liberal Culture*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Hirschi, Caspar, 2005, *Wettkampf der Nationen. Konstruktionen einer deutschen Ehrgemeinschaft an der Wende vom Mittelalter zur Neuzeit*, Göttingen: Wallstein Verlag.
- 2006, „Vorwärts in neue Vergangenheiten. Funktionen des humanistischen Nationalismus in

- Deutschland", Thomas Maissen und Gerrit Walther Hg., *Funktionen des Humanismus. Studien zum Nutzen des Neuen in der Humanistischen Kultur*, Göttingen: Wallstein Verlag, 362-395.
- 2012, *The Origins of Nationalism: an Alternative History from Ancient Rome to Early Modern Germany*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hobsbawm, Eric, 1990, *Nations and Nationalism since 1780 : Programme, Myth, Reality*, Cambridge: Cambridge University Press. (浜林正夫・嶋田耕也・庄司信記, 2001, 『ナショナリズムの歴史と現在』 大月書店.)
- Jensen, Lotte, ed., 2016, *The Roots of Nationalism: National Identity Formation in Early Modern Europe, 1600-1815*, Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Kohn, Hans, 1944, *The Idea of Nationalism : a Study in its Origins and Background*, New York: Macmillan.
- Kumar, Krishan, 2003, *The Making of English National Identity*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 2005, "When was the English Nation?", Atsuko Ichijo and Gordana Uzelac eds., *When is the Nation: Toward an Understanding of Theories of Nationalism*, London/ New York: Routledge.
- Malešević, Siniša, 2013, *Nation-States and Nationalisms: Organization, Ideology and Solidarity*, Cambridge: Polity Press.
- Mann, Michael, [1986]2012, *The Sources of Social Power, volume 1: A History of Power from the Beginning to AD 1760*, new ed., Cambridge: Cambridge University Press. (森本醇・君塚直隆訳, 2002, 『ソーシャル・パワー——社会的な〈力〉の世界歴史 (1) 先史からヨーロッパ文明の形成へ』 NTT 出版.)
- Mason, Roger A., 2014, "Beyond the Declaration of Arbroath: Kingship, Counsel, and Consent in Late Medieval and Early Modern Scotland", Steve Boardman and Julian Goodare eds., *Kings, Lords and Men in Scotland and Britain, 1300-1625*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 265-282.
- 中澤達哉, 2009, 『近代スロヴァキア国民形成思想史研究——『歴史なき民』の近代国民法人説』 刀水書房.
- Reynolds, Susan, 1983, "Medieval Origines gentium and the Community of the realm", *History*, 68 (224): 375-390.
- 1984, *Kingdoms and Communities in Western Europe 900-1300*, Oxford: Clarendon Press.
- 2005, "The idea of nation as a political community", Len Scales and Oliver Zimmer eds., *Power and the Nation in European History*, Cambridge: Cambridge University Press, 54-66.
- Roshwald, Aviel, 2006, *The Endurance of Nationalism: Ancient Roots and Modern Dilemmas*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 左古輝人, 2017, 「近世英国における Society 概念の形成——テキストマイニングによる分析」『社会学評論』 68 (3): 368-385.
- Smith, Anthony D., 1986, *The Ethnic Origins of Nations*, Oxford: Blackwell. (槇山靖司・高城和義訳, 1999, 『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』 名古屋大学出版会.)

- Storm, Eric, 2018, "A New Dawn in Nationalism Studies? : Some Fresh Incentives to Overcome Historiographical Nationalism", *European Historical Quarterly*, 48 (1): 113-129.
- Wicke, Christian, 2019, "Constructivism in the History of Nationalism since 1945", Stefan Berger and Eric Storm eds., *Writing the History of Nationalism*, London: Bloomsbury Academic, 131-154.
- Zernatto, Guido and Alfonso G. Mistretta, 1944, "Nation: The History of a Word", *The Review of Politics*, 6 (3): 351-66.

謝辞

本研究は、JSPS 科学研究費 補助金（科研費）19K13601 の助成に基づくものである。

Why and How Pre-modern Concepts of “Nation”s can
be of Interest?:
a Concept-focusing Critical Approach to Modernist
Interpretation of Nationalism

KOJIMA, Nozomu
Tokyo Metropolitan University
nozomukojima@gmail.com

